「没後５年北杜夫展～作品に描かれた信州松本～」報告
～北文学の継承と発信のために～

村　田　　輝（信州大学附属図書館）

2016（平成 28）年 10 月 4 日（火）から 11 月 7 日（月）まで、信州大学附属図書館（以下、「当館」）では「没後５年北杜夫展～作品に描かれた信州松本～」（以下、「当展」）を開催した。当展は、信州大学の前身校のひとつ、旧制松本高等学校出身の作家・北杜夫（本名：斎藤宗吉）の没後５年を記念し、北さんの作品の魅力を信州松本との関わりをテーマに発信することを目的として企画したものである。

本稿では、当展開催の趣旨や展示内容を報告するとともに、信州大学の文化的シンボルともいえる作家・北杜夫が残した文学遺産の継承と発信をさらに進めていくための方策を考えたい。

「没後５年 北杜夫展」全景（中央図書館１階展示スペース）

1. はじめに

信州大学附属図書館では 2015（平成 27）年 7 月に、北さんの奥様である斎藤喜美子さん、お嬢様である斎藤由香さんのご厚意により、北さんが最後まで自宅に残していた蔵書 600 冊以上の寄贈を受け、「北杜夫文庫」を創設した[1)]。「北杜夫文庫」には、交流のあった作家たちから北さんに贈呈された著者署名入り本、北さんの著作物の私家限定本、さらに北さん自筆の絵画など、貴重な資料が多く含まれている。しかし、「北杜夫文庫」は貴重資料として保管されており、来訪者がいつでも見られる状態にはなっていない。そこで、当館では折にふれて企画展示やイベントを開催し、一般の人々が「北杜夫文庫」に接することのできる機会を設けることとしている。

奇しくも 2016 年は北さんが 2011（平成 23）年 10 月に急逝されてから 5 年目に当たり、山梨県立文学館での「北杜夫展」の開催、北さん原作の児童文学作品『ぼくのおじさん』の映画化公開など、作家・北杜夫の業績を改めて見直していく動きが広がっていた。そこで、当館においても「北杜夫文庫」を活用し、これらの動きとのつながりも意識しながら、「北杜夫展」を企画・開催することとなった。

当館は文学館などと比較すると、展示にかけられる予算、設備、人員、ノウハウなどあらゆる点で及ばない。しかし、北さんが青春の日々を過ごした信州松本に位置し、旧制松本高等学校（以下、「松高」）の伝統を継承する大学の図書館であるという強みがある。また、学生の勉学を目的とした施設である大学図書館内で行う展示は、文学館等で行われる展示とは異なる性格を持たざるをえない。当展ではこれらの点に配慮しつつ、信州大学附属図書館ならではの企画を行い、北文学の継承と発信の一翼を担いたいと考えた。

2. 開催概要

当展のテーマを考えるに当たっては、信州松本が育み、信州松本を描いた作家・北杜夫という観点を重視し、標題を「没後 5 年 北杜夫展～作品に描かれた信州松本～」とした。さらに、中央図書館のみでなく、医学部図書館でも展示を行うことで、展示の幅に拡がりを持たせた。そのコンセプトは次のとおりである。

- 北さんが 2011 年に急逝してから 5 年、「北杜夫文庫」創設から 1 年を迎えるに当たり、信州松本が育んだ作家・北杜夫の世界を「北杜夫文庫」収蔵資料から振り返る。
- 北文学を信州の地域資源として捉え、松高とのつながりのみならず、信州の山や自然と関わらせた展示を構成する。
- 医学部図書館でも医者としての北杜夫にスポットを当てたミニ展示を開催し、医学部生にも関心を持ってもらえるように工夫する。

当展への来訪者には、学生、教職員、地域の一般市民、そして全国の北杜夫ファンが想定された。このうち特に学生に対しては、当展を作家・北杜夫とその作品に関心を持ってもらうきっかけにすることをねらった。残念ながら最近の信州大学生は北さんの作品を読んでいないことも多い。しかし、松本を舞台にしたアニメーション映画が松本市民に支持されるのと同じように、松本がしばしば舞台となる北作品は信大生にとっても親しみやすいはずである。そこで、「信州松本」をキーワードに、視覚的要素も含めて展示することは、信大生を北作品に誘引するうえで有効であると思われた。

「山」をデザインしたポスター

また、当展のもう一つのキーワードを「山」とした。2016 年から国民の祝日「山の日」が施行され、山岳都市である松本では「山」を巡って盛り上がりを見せていた。当館においても、山の日設立記念の企画展示として「次世代につなぐ山岳図書～本に見る学士山岳会と小谷コレクション～」を 2016 年 7 月から 8 月にかけて開催している。昆虫マニアであり、信州の自然に憧れて松高を選んだ北さんも、入学後、精力的に登山に挑んだ。北さんの山行の経験は多くの作品に描かれており、その詩的・抒情的であるとともに、昆虫や植物に対する該博な知識に支えられた自然描写は信州の山々の姿を魅力的に伝えている。ちなみに当展のために作成したポスターは、北アルプスの峨々とした山々を背景としたデザインであり、「山」のコンセプトを表現したものである。

さらに、中央図書館のみではなく医学部図書館でも同時展示を行ったことが今回の企画展示の特徴である。医学部図書館では医者としての北杜夫にスポットを当て、医学部の学生の関心を引くことを試みた。「信州松本」や「山」のテーマとは離れるが、多様な側面を持つ作家・北杜夫へのアプローチのひとつとなった。

3. 展示の構成と内容

中央図書館での展示は 1 階の展示スペース全体を使用し、5 つのコーナーから構成した。医学部図書館では小規模ながら、独自の構成で展示を行った。以下にその概要を紹介する。

3.1 旧制松本高等学校と北杜夫

中央図書館での展示は「信州松本」をテーマとしている。最初のコーナーでは旧制松本学校時代の北杜夫を、当時の寮の写真などとともに紹介した。使用した資料は、松高時代の北さんの写真（ボロ学生服姿や西穂高での写真など）、恩師（望月一恵）との写真、旧思誠寮（松高の学生寮）と寮から見える山々の写真、旧制高等学校記念館から借用したパネル「松高生と山」、松本市内を走っていた路面電車の写真や北さんの作品からの引用文等である。

文学の展示は博物や美術の展示とは異なり、文字ばかりで面白味のないものになってしまいがちであるといわれる。そのためか、最近の文学展では、視覚や聴覚に訴えた展示を行うなど、来訪者の関心を引くための工夫がなされていることが多い。このコーナーでも、文章による説明は最小限にとどめ、作品の一部からの引用と写真を中心に、眺めるだけでも旧制松高時代の北杜夫の様子がわかるようなラフな構成とした。特に次のコーナーである「山々を愛した北杜夫」への導入部として効果を考え、北さんが信州の自然に憧れて松高を目指したことや、3年間を山々とともに過ごし、信州松本の地を「親しいふるさと」[2)]として深く愛するに至った様子を感じ取れる構成とした。

旧制松本高等学校と北杜夫

3.2 山々を愛した北杜夫

このコーナーでは、北作品への従来にないアプローチを試みた。『幽霊』や『どくとるマンボウ昆虫記』、『どくとるマンボウ青春記』などを読むまでもなく、北杜夫の文学的な原点が「信州松本」にあったことは間違いがない。数々の作品に、北さんの目に映った「信州松本」が瑞々しい感性とユーモア感覚によって描かれている。これらの作品を優れた文学としてのみならず、山岳都市である「信州松本」の地域資源として捉え直し、作品の中のバーチャルな山々と、松本を取り囲むリアルな山々をつなげていくことがこのコーナーのコンセプトであった。

今回の企画のために北作品を読み直す中で再認識させられたことは、北さんの関心の方向があくまでも<自然>にあったということである。松本の魅力が豊かな<自然>にあることはもちろんだが、松本城に代表される<文化>の魅力も欠かすことのできない側面である。ところが、北さんの作品の中には松本の町の描写はあるものの、不思議なことに松本城は全く姿を見せない。代わりに作品に繰り返し描かれているのは北アルプスや美ヶ原の「山々」であり、山々に棲息する「昆虫」であった。

「山々を愛した北杜夫」では、そんな北杜夫の世界を作品からの引用文と写真をコラボさせることにより表現した。信州の山々の写真の多くには、信州大学職員である若林武さんが撮影した写真を使用させていただいた。「上高地」「槍」「穂高」の雄大な写真、可憐な「蝶」や「花」の写真を、作品からの引用文とともに壁一面を巡るように配置することで、作品の世界を視覚的に表し、その魅力を感じてもらえるようにした。同時に、作品に描かれた世界を通して、来訪者に信州のリアルな山々を旅してみたいと思わせることがこの展示のねらいであった。

山々を愛した北杜夫

3.3 自筆短歌とエッセイ原稿、絵画

このコーナーでは、北さんの自筆資料８点を展示した。展示資料の中でも、昆虫採集を通じて北さんと親交があった平沢伴明さんからの預託資料３点（自筆短歌掛け軸２点、エッセイ原稿１点）は、今回初公開である。

これらの初公開資料は、信州甲虫研究会の会長であり、本学繊維学部の卒業生でもある平沢さんが、貴重なコガネムシの標本を北さんに贈呈したお礼として貰い受けたものである。「北杜夫文庫」が創設された 2015 年、平沢さんは、多くの人が資料を見られる機会をつくってほしいとの願いから、これらの資料を当館に預託された。

自筆短歌掛け軸は、２点とも「梓川」を題材としたもので、松高に入学した北さんが、終戦間際の昭和 20 年 7 月末、憧れの上高地に初めて旅したときに詠んだ短歌である。

梓川の水音聞きつつ垢じみし畳のうへに黙してゐたり
梓川の音のみ高くこの峡は恐ろしきまで静まりにけり

短歌掛け軸 2 点、短歌色紙 3 点、絵画

北さんが目の当たりにした上高地は、悲惨な戦局とはかけ離れた別天地であった。静かで雄大な景色や梓川の清らかな流れは、本土決戦で死ぬことを覚悟し、ひどく感傷的になっていた北さんに鮮烈な印象を与えた。自伝的短編小説「神河内」（『母の影』所収）には、そのときの様子が克明に描かれている。北さんはその後も晩年に至るまで、繰り返し上高地を訪れることとなった。

エッセイ原稿１点は「親切なゼゲン屋さんに大迷惑をかけた顛末」[3]と題されており、1992（平成４）年８月、北さんが平沢さん所有のコガネムシの標本を貰い受けるために松本を訪れた際の顛末がユーモラスに描かれている。後に平沢さんは自らが発見した新種のコガネムシに和名「マンボウビロウドコガネ」、学名「ユーマラデラ・キタモリオイ」と名付け、北さんに献名した。

このコーナーにはその他に、旧制高校記念館からお借りした自筆短歌の色紙３点（いずれも松高時代に詠まれたもの）、2011 年に本学松本キャンパスで開催された日本昆虫学会松本大会へ寄せられた直筆メッセージ「「虫や」のみなさまへ」、北さんがアルプスの山々を描いた絵画を展示した。いずれも北さんならではの独特の字体や絵筆で描かれた貴重な品である。

自筆エッセイ原稿「親切なゼゲン屋さんに大迷惑をかけた顛末」ほか

3.4 北杜夫文庫から

次のコーナーでは、2015 年に設置された「北杜夫文庫」収蔵されている書籍からの展示を行った。残念なのは、当館で所有している展示ケースが限られており、十分な数の資料を表に出せないことであった。そこで今回は、今回の企画展のテーマと特に関連が深い書籍を厳選して展示することとした。

展示した書籍は、『どくとるマンボウ青春記』の北さん署名入り本、信州松本が舞台となっている小説『幽霊』、『少年』等の私家限定本などのほか、北さんが松高時代に使用していたドイツ語文法の参考書（裏表紙に当時の北さんが自ら名乗っていた雅号であった「憂行」と記されている）や、北さんが自室で愛聴していたという松高寮歌集のカセットテープなどである。その他には、著名な登山家・文筆家である深田久弥が北さんに贈呈した著者署名入りの『日本百名山』、映

画「ぼくのおじさん」の公開に因み、旺文社刊で和田誠のカラー挿絵付の『ぼくのおじさん』（現在は新潮文庫でのみ入手可）なども展示した。

なお、「北杜夫文庫」には、北さん自身の多種多様な著作のほか、松高時代の同窓生である辻邦生をはじめ、名立たる昭和の作家たちが北さんに贈呈した著者署名入り本などを多く含んでいる。それらを展示するだけで北杜夫とそれを取り巻く世界を表現することができると思われる。いつか当館の展示設備が整い、「北杜夫文庫」を十全に展示できるようになる日を待ちたい。

信州松本ゆかりの書籍（「北杜夫文庫」から）

3.5 読書コーナーその他

北杜夫展の開催時期は、ちょうど北さん原作の児童作品『ぼくのおじさん』の映画化公開が間近に迫っていた。そこで、当展では映画の紹介も兼ねてティザーポスターを展示するとともに、（株）新潮社や東映（株）から提供いただいた「ぼくのおじさん人形」を館内の各所に飾ることもした。このような親しみやすいアプローチを取ることも、不特定の利用者が訪れる図書館で展示を行ううえでは有効であると考えた。

展示スペースの一角には読書スペースを設け、北杜夫の著作のみならず、北さんの父・斎藤茂吉、旧制松高で出会った盟友・辻邦生、兄の斎藤茂太、長女でありエッセイストとしても活躍さ

映画「ぼくのおじさん」関連資料

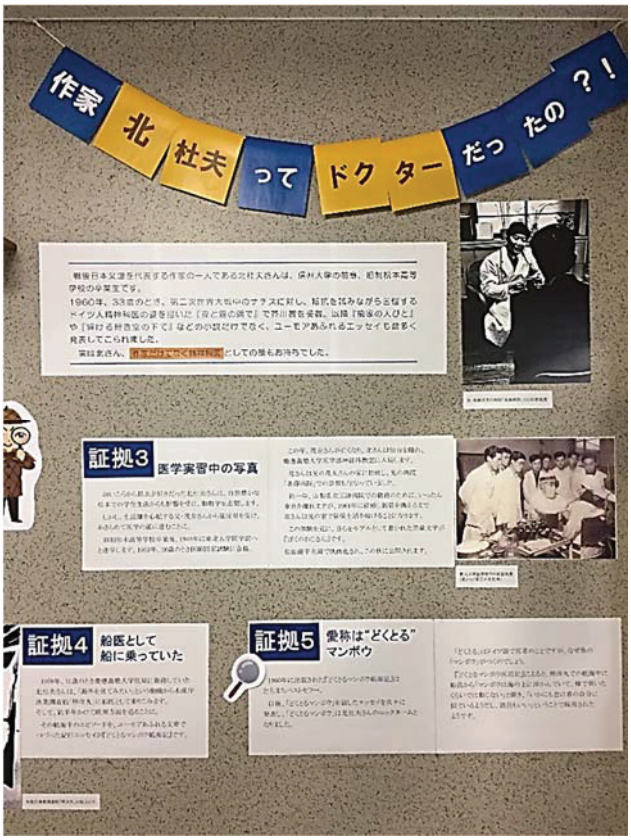
れている斎藤由香さんらの著作を並べ、自由に手に取って読めるようにした。期間中、この読書コーナーでは、北さんのユーモアファンタジー小説である『怪盗ジバコ』を読みふけっている学生の姿などを見かけた。また、北杜夫ファンである人文学部の学生からは『どくとるマンボウ青春記』のポップを書いてもらった。

北さんには『楡家の人びと』をはじめとする硬派な純文学作品もあるが、「どくとるマンボウ」シリーズが広く読まれ、そのユーモアはそれまでの日本文学にはない陽性な世界を切り開いた。さらには、自由な想像力が生んだファンタジーともいうべき作品群や、童話や絵本などにも手を染めており、その作品世界は多彩で多岐にわたる。映画プロデューサーの須藤泰司は、子どもの頃に『ぼくのおじさん』を読んでその面白さに魅かれ、映画化への願いを抱きつづけていたというが、このように北杜夫との出会いは様々であり、少年時代に北さんの作品を通して文学に関心を持つようになったという話もよく聞く。信州大学生が北作品に接する機会をさまざまなかたちで設けていくことは、母校の伝統に触れるとともに、読書推進のうえでも意義のあることだろう。

3.6 ミニ展示「作家・北杜夫ってドクターだったの？！」

中央図書館で開催された当展のスピンオフ企画として、医学部図書館でも「作家・北杜夫ってドクターだったの？！」と題した展示を開催した。小規模な展示であったものの、医者としての北杜夫に光を当てた独自の企画であり、いくつかの証拠から北さんが医者であったことを証明していくというユニークな構成で好評を博した。北さんの東北大学医学部での実習風景など、珍しい写真も展示した。

作家・北杜夫が医者でもあったことは意外と知られていないようである。精神科医の一家に生まれた北さんは、昆虫学者を目指していたものの、父・斎藤茂吉の厳命により、松高卒業後は東北大学医学部に進んだ。『どくとるマンボウ航海記』が大ヒットし、『夜と霧の隅で』により芥川賞を受賞して作家として自立できる目処が立つまで、北さんの本業は精神科医であった。医学には熱心でなかったとエッセイ等では書いているものの、北さんの作品には医師としての経験と知識が濃厚に反映している。医者時代の経験を描いた『どくとるマンボウ医局記』では、爆笑を誘うユーモアの中に、北さんが精神科医として培った鋭い人間観察の目が光っている。



医学部図書館でのミニ展示

ミニ展示では北さんが慶応義塾大学医学部の研修医時代に書いた学位論文「精神分裂病における微細精神運動の一考察」[4]も展示した。この論文は雑誌『慶應医学』に掲載されていることがわかったが、医学部図書館では当該の雑誌を所蔵していた。北さんは本論文により医学博士号を授与され、医師として生きていくうえでの準備もしていた。しかし、その後は作品のヒットにより、作家業に専念するに至った。

なお、このミニ展示をめぐって印象深いエピソードがあった。当展には、北さんの奥様である斎藤喜美子さんにも遠くからご来訪をいただく機会を得たのであるが、医学部図書館でのミニ展示観覧中に、医学部の学生が話しかけてきたのである。その学生はちょうど『どくとるマンボウ医局記』を読んでいたところだといい、本に対する感想などを話した。北さんの遠い後輩である医学部生が亡き夫の作品を読んでいたことを知った喜美子さんは、思わずその場で涙を拭いていらした。

この出来事は全くの偶然であったが、信州大学附属図書館での展示が北作品の若い世代への継承にいくらかなりとも力を添えることができたのであれば、この展示を開催した意義は十分にあったと感じたのである。

4. 北文学の継承と発信のために

最後に、「北杜夫文庫」を持つ当館が、今後も作家・北杜夫の文学を継承し、発信していくうえでの課題をいくつか記しておきたい。

○　「北杜夫文庫」には 600 冊以上の資料があるが、展示設備が限られているため、一度に展示できる資料が限られてしまう。今回もやむなく展示を断念した資料があった。北杜夫の多彩で多岐にわたる世界を発信していくためには、多くの資料を一度に展示できる環境を整備する必要がある。

○　松高が生んだ作家としてもう一人忘れてはならないのは辻邦生である。辻邦生は北杜夫の

生涯の友人でもあったことから、今後、「北杜夫と辻邦生」のテーマで展示を行うことは、信州大学が開催する企画展示として意義深いものになるであろう。「北杜夫文庫」の中には、辻邦生が北さんに贈呈した書籍が多数含まれ、自筆のメッセージなども添えられている。また、北さんから辻邦生に充てた手紙のコピーも斎藤（北）家からお預かりしており、これらの資料を活用した展示を行いたいと考えている。

○　当館の活動がきっかけになって、信州発の北杜夫研究が盛んになることが期待される。当号の『信州大学附属図書館研究』には、信州在住であり、北杜夫研究を長年にわたって続けてこられた日本歌人クラブ会員の竹内正さんから研究論文を寄稿いただいた。竹内さんは当展に来訪されたことをきっかけに、当誌に研究を発表することとなった。松本時代の北杜夫についての独自の調査に基づき、北杜夫研究に新たな地平を切り開く論考であり、今後も続編を寄稿いただけるとのことである。展示は鑑賞の対象として消費されるだけでなく、創造を促進する触媒ともなるということであろう。

以上の他にも当館がなすべきことは多いと思うが、いずれにせよ、当館が「北杜夫文庫」を所蔵し、企画展示を開催すること等を通して持つことのできるさまざま機会を大切に育てていきたいと考えるのである。

謝辞

当展の開催に当たっては多くの方々の協力を得たので、以下に紹介する。

「北杜夫文庫」を寄贈いただき、当展の開催を可能にするとともに、さまざまな便宜を図っていただいた北杜夫夫人・斎藤喜美子様、お嬢様の斎藤由香様。当展の展示のために「北杜夫略年譜」を加筆・訂正し、提供いただいた元中央公論編集者の斎藤国夫様。貴重な短歌掛け軸、エッセイ原稿を当館に預託いただき、展示・公開を快く了解していただいた昆虫学者の平沢伴明様。信州の山々の素晴らしい写真を数多く提供いただいた信州大学職員の若林武様。松本市内を走る路面電車の写真を提供いただいた同志社大学鉄道同好会 OB 会の湯口徹様。展示パネルや短歌色紙など、いくつかの重要な展示資料を提供いただき、当展の協力者となっていただいた松本市立博物館分館・旧制高等学校記念館。映画「ぼくのおじさん」関係の資料を提供いただいた松本シネマライツ、株式会社新潮社、東映株式会社。

以上の方々には心より感謝を申し上げたい。

また、当展の企画は筆者のほか、当館職員である林康代、進地律子が中心になって行い、ポスター・展示物作成を担当した荻原千代、図書リスト作成・展示物設置等の作業で尽力した正武田敦巳を始め、多くの職員の協力を得て実施に至ったものである。

注・参考文献

1) 村田輝.「北杜夫文庫」紹介．信州大学附属図書館研究．2016，5 号，p.171-181．http://hdl.handle.net/10091/00018662
2) 北杜夫の日記（昭和 23 年 4 月 7 日付、『或る青春の日記』（中央公論社，1988）所収）には、松高卒業後、進学先の仙台に行かずに松本に舞い戻ってきた北さんが次のように書いている。
「私たちはあの松本の広場に降り立つ。街はいつものとおりに慌しがっている。（中略）私は一人のびのびとフロに入り、少しまぬけになる。親しいふるさとでは人間は愚に帰るものだ。」（傍点筆者）
3) エッセイ「親切なゼゲン屋さんに大迷惑をかけた顛末」は、北杜夫著『マンボウ思い出の昆虫記：虫と山と信州と』（信濃毎日新聞社，2013.7）に掲載されている。
4) 斎藤宗吉．精神分裂病における微細精神運動の一考察．慶應医学．1960，37(7)